

古典落語 (上)

興津要編



校注者 | 興津要 1924年栃木県生れ。早大国文科卒。早大教授。日本近世文学、ことに江戸戯作を専攻。著書、「転換期の文学——江戸から明治へ」「明治開化期文学の研究」「落語——笑いの年輪」「異端のアルチザンたち」「江戸庶民の風俗と人情」「江戸小咄漫歩」ほか多数。

こてんらくご
古典落語 上

おきつ かなめ
興津 要 編

© Kaname Okitsu 1972

昭和47年4月15日第1刷発行

昭和58年12月10日第38刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan



講談社文庫

定価580円

デザイン——菊地信義

製版——株式会社まゆら美研

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-131083-6 (3)



講談社文庫

古典落語

上

興津 要 編

目次

うそつき弥次郎	九
かつぎや	二六
明 烏	二八
長屋の花見	三九
三人旅	四三
厩火事	五二
寢 床	五九
千早振る	六四
猫 久	七二
しわい屋	七五
転失気	八二
出来心	八九
湯屋番	九二

三二	一八九	一八二	一七三	一五九	一四六	一三四	一二二	八三	五九	五九	二八	九
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

まんじゅうこわい

短命

うなぎの幫間

そこつ長屋

酢豆腐

恪氣の火の玉

三方一両損

たがや

居残り佐平次

目黒のさんま

小言幸兵衛

宿屋の富

道具屋

なめる

時そば

たらちね

二三五

二四五

二五六

二七四

二九一

三〇八

三一五

三二九

三四一

三六七

三七七

三九六

四一三

四三三

四四八

四五五

もと犬

無精床

芝浜

解説

落語の歴史

四七三

四八六

四九五

五〇七

五三三

古典落語(上)

うそつき弥次郎

うそというものも、世のなかにもまるつきりないとこまる場合がございます。

商人に世辞愛嬌といううそがあり、傾城に手練手管、仏法に方便といううそがあり、軍人に計略といううそがございます。

このようにうそはいろいろと役に立つ場合がございますが、なかには、また、つまらないうそをついて、人をかついだりしてよろこんでいる人がいくらもございます。

「おや弥次郎さんじゃないか。どうもひさしくあわなかつたな」

「へえ、ひさしぶりで帰ってきたんで、あなたのうちをわすれて通りこしてしまいました。ほうばうへ顔をだそうとおもっても、なんだかようすがかわつちまつて、すっかりまごまごしています」

「そういえば、二、三年あわなかつたような心持ちだ」

「いいえ、それほどじゃありませんが、一年ばかり遠方へいっておりました」

「はあ、おまえさんのことだから、なにかもうけ仕事かね」

「いいえ、べつにもうけ仕事というほどのことはありませんが、職人のありがたさで、遠国へい

けば、手間賃も倍もらえらるので、見物かたがたでかけました」

「そりゃあ結構だった。もうかつたらう」

「ところが、それが江戸っ子の持ち前で、ぱっぱと小づかいをつかってしまふから、見物したところとみやげものを買えたぐらいが、せめてものもうけでございます」

「それだけでもまあよかったじゃないか……なにかおもしろいみやげばなしがあるかい？」

「ええ、ところかわれば品かわるとやらで、ずいぶんおもしろいことがあります」

「ところで、まだきいていなかったが、どこへ行ってたんだい？」

「北海道へゆきました」

「北海道へ……ふーん、たいへん遠いところへいったな……費用むこう持ちで、そういうところをみてこられるというのは結構なはなしだ」

「へえ……」

「いいけしきのところがあつたらうな」

「けしきやなにかはこちとらにとつては、どうつてことはありませんが、さむいのはおどろきでした」

「そうだらうな」

「さむいのなんのつて、汽車や汽船に乗つてゐるうちはそんなにさむくはありませんが、陸へあがつてあるきだしておどろきましたね、あれはからだがかたくなつちまつて……それから宿へついて、風呂場へいって、

風呂桶のふたをとってみると、いくらさむくても湯はあつうございます」

「あたりまえさ、火でわかしたんだ」

「あついからうめてもらつてゐるうちに、ながしへ足が凍りついてしまいました」

「ばかをいいなさんな」

「それから湯からあがつて、二階へくる、すぐにさむくなつちまうんで……」

「そうだろう、それはほんとうだ」

「さむいから、お茶でも飲んであつたまろうとおもつて、お茶をたのむと、女中がお茶を持ってきて、お茶をおかじりなさいというんで……」

「おい、じょうだんじやないよ。お茶をかじるやつがあるかい」

「だから変だとおもつたら、なるほど凍つてやがる」

「だって、おまえ、お茶というものは湯だよ」

「それが下じやあつかつたのが、二階へ持つてくるうちに凍つちまつた」

「いいかげんなことをいうなよ」

「いえ、まったくそうなんで……あくる朝おきると、すぐに仕事にかかるといふんで、旅のつかれをなおさなくちゃあいけないとおもつて、生^{なま}たまごを三つ四つ持つてきてくれと女中にたのむと、ただいまゆでてまいりますというんです。ゆでたまごじやない、生たまごだというと、ゆでなければ生になりませんというんで……」

「おい、ばかなことをいいなさんな。ゆでたやつがどうして生になるんだ？」

「わたしも変だとおもってきいてみたら、凍っているから、ゆでるとちょうど生なまになるんだそう
で……」

「なんだかわかったようなわからないようなはなしだな」

「あるとき、宿屋の二階からみていると、下を魚屋が通って、となりの家のおかみさんが、お刺身を半分くれというと、ほそながい魚をつかんで、ポキンと折って売っているから、妙なまねをするとおもってきいてみると、それが凍った刺身なんで……焼くとこれが生になるんで……」

「じょうだんじゃない」

「そのうちに、いいあんばいに雨がふってきました。あー、このふりじゃあとても仕事はできねえ、やすみだというんで、まあ旅のつかれをやすめられるとおもって、家にひっこんで、おどろきましたね、この雨が凍ってふるんだから……」

「雨が凍れば、あられとか雪とかいうんだろう」

「いいえ、そんなもんじゃねえんで……まるでガラスの棒ですね」

「ばかなことをおいいでない」

「まあ、こっちじゃあ雨を一つぶ二つぶというけれど、あっちへいくと一本、二本といいます」

「ばかなことをいうなよ。第一、それじゃあ傘がさせまい」

「それだから、むこうは紙の傘はありません」

「布かい？」

「布でもつきやぶってしまうから、たいていはブリキですね」

「ブリキの傘？」

「ええ、貧乏人はブリキをつかつて、中くらいのひとはトタンで、金持ちはあかがね」

「それじゃまるでひさしだよ。ばかばかしい……あかがね張りの傘があるものか」

「ほんとうですよ。けれども、その傘をさしてあるくと、ガンガラン、ガンガランと音がしてうざうざしいものだから、むこうでは、ちよいと近所へいくくらいのことでは傘はさしません。雨払いという棒を持つてあるきます。あたしもその棒を持つて、くるくるあたまの上をふりまわして、筋むこうの家へたばこを買いに出かけました。あぶないからおよしなさいといったんですが、なあーに江戸っ子だ、こんなことはわけはねえと、くるくるとふりまわしてうまくいったんで、宿屋の番頭なんぞは手をたたいて、うまいうまいとほめてやがった。ところが、帰りには、すこし気がゆるんだものとみえて、うけそこなつたんで、耳たぶのあたりへとげが二本ささった」

「おいおい、雨のとげというやつがあるかい」

「ほんとうですよ。ぴりぴりとしていたくつてしょうがねえ。すると、宿屋の女中が火ばしで火をはさんできて、フーフーふきつけるととけちまった」

「じょうだんいっちゃいけない。とげのとけるやつがあるかい」

「ほんとうですよ。ただおどろいたのは雪ですね」

「なるほど、新聞にもでていますが、雪はたいそうふるそうだね」

「へえ、ある晩のことで、わたしがよく寝ていると、ドタリ、ドタリという音がするんで、おど

ろいてとびおきて浅間山の噴火かとおもったら、それが雪がふってきたんで……」

「なんだい、その音は？」

「一つぶが、どうしてもたどんぐらいの大ききの雪で……」

「ばかなことをいいなさい。わたしは越後に心やすいひとがいるが、つもる雪というものはごくこまかい、こんなところでもたくさんつもるときはこまかい雪だ」

「それが北海道のは大きい。家の屋根の上までつもってしまつて、はじめはドタリドタリ音がするが、しまいには音もしくなる。ふりはじめた時分には、土地のものはなれておりますから、そのあいだをうまくぐりぬけてあるいております。そのかわり、ひとつ大きな雪がぶつかったら即死です。その場へぶつたおれてしまう。これをゆきだおれという」

「おい、またはじまつた。しかし、雪がつもつちまつたら、まるでそとへでられまい」

「ところが大ちがいで、ひさしがながくでいますから、その下を通つてどこへでもゆきます」
 「なるほど、おまえのはなしでもまんざらうそばかりはない。越後の人にきいたのにも、雪のふかいところには、ひさしがながくでいて、ところどころにむこうがわへゆくトンネルみたやうなものができているというが、そりやあほんとうだろう」

「ええ、竹のふしをぬいた樋竹といたけみたやうなものがところどころにでています」

「なんだいそれは？」

「むこうがわの人とはなしができるんで……」

「なるほど」

「むかって左のほうへ口をつけると、右の穴からむこうのはなしがきこえる」

「それじゃ電話だ」

「いなかの人はていねいだから、朝おきると、おはようございます、ごきげんよろしゅう、おはようございます。おはようございますというやつが、あっちでも、こっちでも、さむさがひどいもんだから、みんな竹のなかで凍っちまいます」

「おい、おはようが凍るやつがあるかい」

「それだからふしぎなんで……源兵衛さんおはようございます。そういう声がちやごちやとかたまっちまう。それをみんなこまかく切つて、一本いくらといって売ってます」

「そんなものを買うやつがあるものか」

「いえ、これがなかなかつかい道があるんで……女中やなんか朝なかなか目をささない、目ざまし時計ぐらいでは目をささないやつがあるから、あしたはおかみさんが芝居へいくとか、どこかへでかけるとかいふときには、女中部屋へおいてほうろく（素焼の土なべ）へ、かけておく……そのほうろくが十分にあつくなつたところへ、凍つたおはようございますを五、六本ほうりこむと、これがとけてくる、雪のなかでむこうへ通そうというくらい大きな声で、おはよう、おはよう、おはよう……」

「おお、びっくりした。そんな大きな声をだすやつがあるかい。となりの家で胆はぢをつぶさあ」

「こんな大きな声がするから、たいがい寝坊な女中だって目をさします」

「じょうだんじやない。しかし、さむいだろうな」